齋田記念館

SAITA MUSEUM

財団法人 齋田茶文化振興財団
〒155-0033 東京都世田谷区代田3-23-35
TEL03-3414-1006 FAX03-3414-7336

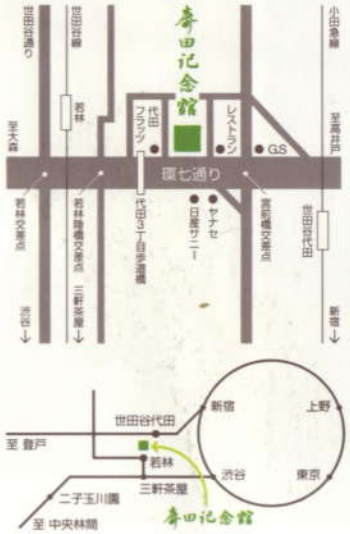
財団の設立

このように、齋田家は茶との関わりが深く、茶に関する器具、文献等も多く残されていることから、これらの資料等の保存・一般公開を行い、合わせて調査研究・研究助成等を行うことにより、わが国の茶文化の振興に寄与することを願い、平成六年、財団法人齋田茶文化振興財団が設立された。母体となる土地建物・美術品等は、齋田家十三代(先代)平太郎からの寄付によるものである。

所蔵している資料は、齋田家文人の書跡・典籍・絵画、茶製造流通に関する古文書、茶道具・民具、茶書等であり、特徴としては、茶関係の書籍が充実している点があげられる。また、それらの資料を保管・展示するための資料館(齋田記念館)も平成九年十一月に開館し、公開されるに至った。その他事業内容として年間一～二回の展示の外、資料の閲覧、研究者への助成、研究紀要の発行、講演会の開催等がある。

齋田記念館

●開館時間―午前10時～午後4時30分(入館は4時まで)
●休館日――土曜日(第四土曜日を除く)、日曜日、祝日
●交通――渋谷駅より、新玉川線乗りかえ三軒茶屋下車、地下道を通り東急世田谷線乗車若林駅下車徒歩10分
新宿駅より小田急線で世田谷代田駅下車
(注・各駅停車しか止まりません)徒歩7分
●お願い――館内での写真撮影、模写ならびに万年筆、毛筆、ボールペンなどの使用はお断りいたします。
館内での飲食、喫煙はご遠慮ください。●閲覧は要電話



世田谷の齋田家

小田急線世田谷代田駅から隣駅梅ヶ丘にかけての地域は昔、代田村といい武蔵野の色濃く残る純農村地帯であった。代田八幡宮から南へのびる一帯は、小田急線敷設の昭和初年頃は近在に知られた梅林であり、環状七号線が開通し、宅地化が進む昭和三十年代頃まで残っていた。今は環状線の交通量も増え、ますます宅地が過密化し、往時の面影を留めない。そのような中、道路沿いの白壁が続く一画に齋田家は位置している。約三千坪の敷地に約二百坪の建物を有し、建物は、幕末に焼失したものを復元するために六年間の準備期間を経た後、昭和六年より四年かかって建てたものである。当時としては材料・技術共に最良のものを用いており、近代の数寄屋造りとして建築学的にも貴重な資料であることから、平成八年世田谷区の文化財に指定されている。また敷地内の豊かな樹木はこの周辺においては貴重な緑といえるであろう。

齋田家は木曽義仲の老臣・清和源氏中原兼遠を遠祖と伝えられ、のち齋田姓を名乗り、吉良氏に従った。天正十八年(一五九〇)吉良氏の没落後土着、帰農し、代田村開発の中心となり、江戸中期以降には開墾などによる土地の拡大が進み、嘉永期段階では七十五石を所有するにいたった。このためもあり齋田家は、文政八年(一八二五)八代平吉(号・東野)の代に、代田村の年寄り役から名主の家になり、以降代々同役を世襲した。

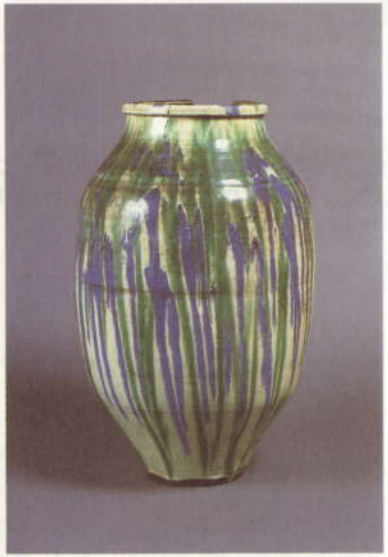
また同家からは江戸後期以降学者・文人を輩出している。初めて名主になった八代東野はその中でも最も優れた学者であった。安永二年(一七七三)七代万蔵の長男として生まれ、名は大在、通称平吉、字を子質、別号を安斎といった。幼より学を好み、江戸に出て書を東江源鱗に学び、叔父の館林藩秋元家の儒官齋田東城(敬熙)に経史を教授された。のち二家をなし代田村に学塾発蒙塾を開くと、令名を慕い江戸より有為の士の入門する者が多かったという。儒者安井息軒らとの交流も深かった。嘉永五年(一八五二)に没している。その子九代万蔵は、享和元年(一八〇一)に生まれ、名は鶴、字は、有巣、号は雲岱、墨林斎と称した。画を大岡雲峰に学び、特に本草学関係の草木・花・動物等の精密な写生画を志し、それらを纏めた図鑑を多く残した。安政五年(一八五八)に没している。その他、十代東岱、十一代又一郎の妻小枝子等多くの文人を出しており、世田谷の地方文化発展に貢献を成した。

維新後は明治元年(一八六八)十代平太郎(号・東岱)が代々自家で小規模に生産していた茶の商品価値に着目し、同三年には伊勢四日市から製茶師を招き、本格的に製茶を開始した。その齋田茶は、各種の万国博覧会や内国勧業博覧会で入賞するなど、品質には定評があり、輸出も盛んに行った。明治十七年(一八八四)設立の「荏原群茶業組合」には十一代齋田又一郎が組合長に就任しており、世田谷の茶業の発達に大きな役割を担ったのである。

齋田雲岱図譜より「麝香猫(ジャコウネコ)」

齋田雲岱図譜より「花菖蒲(ハナショウブ)」

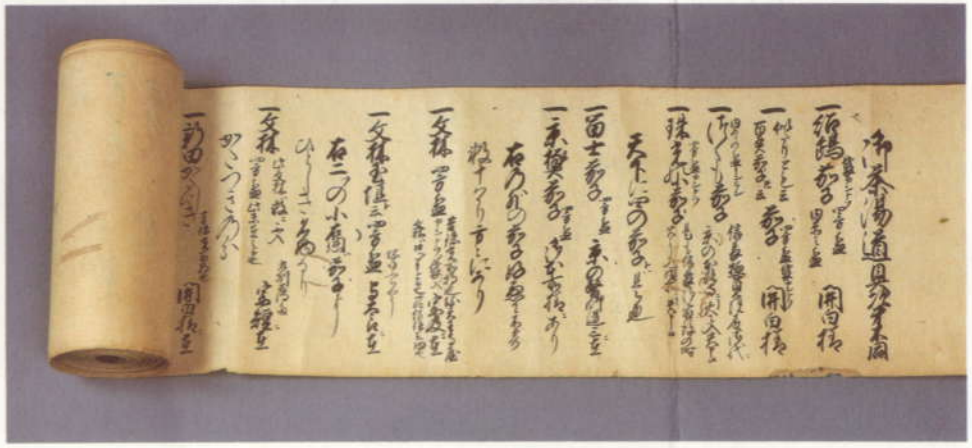
齋田雲岱図譜より「虹(ヲコゼ)」



明治期、齋田茶を輸出する際に使用した葉茶壺

第二回内国勧業博覧会・齋田家煎茶二等授賞

万国博覧会・齋田茶褒賞
(一八八五・アメリカ)



巻子本『山上宗二記』
天正十六年(一五八八)高野山安養院宛